

六朝模擬詩小考

衣川賢次

京都大學

一 模擬詩の性格

六朝の模擬詩は、その數二百首ちかくを今に傳える。『文選』が雜擬の部を立てて、その主要な作品（十家六十三首）を採録するなどは、この時代の盛行をものがたるものである。これらの詩は、文學的、文學史的に價値のないものと看做されるべきではなく、批評性や寓意性の視角から検討される餘地があると考えられる。⁽¹⁾ たしかに、劉勰が文章練達の處方を統括して、「宜摹體以定習、因性以練才」⁽²⁾ 『文心雕龍』體性篇』というように、模擬は習作の方法ではあった。だが習作方法としての模擬は創作方法としての模擬と區別されねばならないし、模擬行為爲じたい、ロダンのいうように「この模寫は）手に來る前に心を通る」⁽²⁾ ような、創造性

六朝模擬詩小考（衣川）

は對象（傳統）を攝取する中でのみ獲得されるという、貴重な經驗をもたらずものであることに注意すべきである。またほんらい破り棄ててしまふべき習作であつたなら、文集に残り詞華集に採られる道理はない。そこには模擬詩が單に習作ではないとする共通した認識があつたと考えねばなるまい。他ならぬ情性の吟詠を重んじた鍾嶸は、陸機の「擬古詩」、謝靈運の「擬魏太子鄴中集詩」を「五言之警策」（『詩品』序）、すなわちその詩人を代表すべき、且つ五言詩のなかで傑出した作品と認めていた。模擬を一概に習作と看做して一蹴することは、盪の嬰兒をも水と一緒に流してしまふことになりかねないのである。

模擬詩の性格を考える際にまず注目すべきは、後漢末から魏晉にかけて本格的な文學批評が展開する、その風潮を通過して産み出されたということである。

曹丕は『典論』論文篇（『文選』卷五十二）において、從來の文人相輕の風は客觀的な批評基準を伴わないところにその蔓延の事由があると見て、作家と文體ジャンルを分析することを提唱した。そこで導入されたのが「氣」の概念であつて、

作家には各々の個性（體）があり、それが作品にあらわれ、獨特の風格（氣）を醸しだすと考え、それらを盛る器としての文體の本質を究めんとしたのであった。⁽³⁾ この個性の重視を、それに聯なる獨創的表現の問題として積極的に評價し展開させたのが陸機の「文賦」〔『文選』卷十七〕であった。「收百世之闕文、採千載之遺韻、謝朝華於已披、啓夕秀於未振」という高らかな宣言は、陸機自身の文學に對する自負でもあった。さらにこの方向を展望すれば、劉宋以來の文學にふれた劉勰の指摘がある。「又製同他文、理宜刪革、若掠人美辭以爲己力、寶玉大弓、終非其有」〔『文心雕龍』指瑕篇〕。個人の獨創的表現を重んじる立場からは、たとひ自己の胸裡から生まれた表現であつても、古人と偶合すれば削除して別の語を求めよ、まして剽竊など論外の事という。剽竊と踏襲の問題は用典のこととも絡まって實際の作品に照らしてみても微妙な關係にあるのだが、理論としては當然この嚴格さ潔癖さに到達するものである。

こういう個性と獨創の強調の時代に模擬詩が生まれたことは決して偶然ではない。模擬詩にあつては、そのたてま

えとして主題ないし素材は既に與えられており、規範の消化とそれからの超脱、修辭的な創意が期待されるばかりである。「擬」（或いは「效」「依」「代」「學」⁽⁴⁾）という文字を詩題に冠することは却つて創意を發揮しようとする作者の姿勢を暗示している。ゆえに「文賦」を書いた陸機その人が十四首もの擬古詩に取り組んだのも故なしとしないのである。

現存する最初の模擬詩は西晉の傅玄（217〜278）の「擬四愁詩」に求められる。⁽⁵⁾ 傅玄にこういう擬作が残されているのも偶然ではないと思われる。彼は武帝の命を受けて宮廷雅樂の歌辭製作に當るかたわら、また俗樂の歌辭にも旺盛な意欲を示した人であつた。樂府において古辭の主題を踏襲することはこのジャンルの常態といつてよいが、それがほばこの人あたりからはっきりしたかたちをとり始めるらしい。傅玄の樂府詩すべてに一貫しているわけではないが、物語性をもつ樂府、例えば艶歌行〔『樂府詩集』卷二十八〕秋胡行（同、卷三十六）でははっきりと古辭の擬作の方法を採っている。⁽⁶⁾ 傅玄の創作活動をみると、『楚辭』に

擬し、建安文人など先人と同題の賦作をし、更に「七」の文體「七謨」を作り、その序『類聚』卷五十七には歴代の作者に簡潔な批評を加え、「敍連珠」(同上)を書いてこの文體の特質を規定し、併せて作品の評價にも言及している。傅玄に「七」の文體の總集があつたことを摯虞『文章流別論』佚文(『傅子集古今七而論品之、署曰七林』同上)は傳えており、こうした批評活動が總集の編纂という産物を伴うのは摯虞の場合と同様であり、傅玄にあつて批評と創作が一體となつて荷われていたことを示すものである。

第二に、模擬詩には對象への理解と評價が前提として含まれていることである。例えば陸機の模擬した古詩は、後に梁の鍾嶸が「陸機所擬十四首、文溫以麗、意悲而遠、驚心動魄、可謂一字千金。」(『詩品』上、古詩)という最大級の讚辭を與えていることからすれば、陸機もあまた存在した古詩群の中から精選していたに相違ない。そして古詩そのものに對する正面きつた文學的評價も彼に始まるのである。

先人の體——^{スタイル}他に對しては區別され、自己に對しては一

六朝模擬詩小考(衣川)

貫しているといわば個人様式——に模擬する作品は、その詩人の特質をどこに見出すかが探究された結果をあらわしている。江淹の「雜體詩三十首」(『文選』卷三十一)はその代表であり、梁の簡文帝の「戲作謝惠連體十三韻」(『玉臺』卷七)は謝惠連詩の特徴である多彩な修辭技巧(對偶表現、同語反復、蟬聯格)を一詩の中に集中的に驅使したものであつた。

さらに個人様式の探究は對象詩人、對象作品に對する模擬者の解釋である。鮑照の「學劉公幹體五首」は建安の劉楨の詩五首にそれぞれ模擬して書かれたものであるが、いま其五(『鮑氏集』卷四)を例として擧げる。

白日正中時	白日まさに中する時
天下共明光	天下 明光を共にす
北園有細草	北園に細草ありて
當晝正含霜	晝に當りてまさに霜を含む
乖榮頓如此	乖榮 ^{はな} し榮 ^{はな} 頓 ^{とみ} に此の如し
何用獨芬芳	何を ^{はな} 用てか獨り芬芳たらん

抽琴爲爾歌 琴を抽りて爾が爲に歌はんとするも

絃斷不成章 絃斷たれて章を成さず

對象となつた劉楨の詩は「贈徐幹」(『文選』卷二十三)で

あろう。

誰謂相去遠 誰か謂ふ 相去ること遠しと

隔此西掖垣 此の西掖の垣を隔つるのみ

拘限清切禁 清切しき禁に拘め限てられ

中情無由宣 中情 宣ぶるに由なし

思子沈心曲 子を思へば心曲沈み

長歎不能言 長歎して言ふ能はず

起坐失次第 起坐 次第を失ひ

一日三四遷 一日に三たび四たび遷る

步出北寺門 歩みて北寺の門を出で

遙望西苑園 遙かに西苑の園を望む

細柳夾道生 細柳は道を夾みて生ひ

方塘含清源 方塘は清源を含む

輕葉隨風轉 輕葉は風の隨に轉り

飛鳥何翻翻 飛鳥は何ぞ翻翻たる

乖人易感動 乖れし人は感動し易く

涕下與衿連 涕下ちて衿と連なる

仰視白日光 白日の光を仰ぎ視れば

皦皦高且懸 皦皦として高く且た懸かなり

兼燭八絃內 兼く八絃の内を燭らして

物類無頗偏 物類に頗偏ることなし

我獨抱深感 我獨り深き感を抱きて

不得與比焉 これと比ぶを得ず

原詩二十二句に對し擬詩八句、これは一字一句模したものではない。おそらく鮑照は「贈徐幹詩」に漲る幽悶の情調を、例の不敬事件(曹丕の甄夫人を彼獨り拜しなかつた)によつて罪に處され拘禁されていた詩に書かれたものとみて、彼の幽憤悲痛の極みの頂點というまさにその一點に照準を當てて模擬したものに相違ない。すなわち第四句「當畫正含霜」は『淮南子』の故事を踏まえている。「鄒衍事

燕惠王盡忠、左右譖之王、王繫之獄、仰天而哭、正五月而天爲之下霜⁽⁷⁾。」という鄒衍の事蹟を重ねているのは、そのことを端的に示している。「贈徐幹詩」をその視角から解釋するのは、文獻による限り清の何焯〔義門讀書記〕文選卷二に始まるようだが、鮑照は擬作という形によって早い時期にその解釋を示していたのである。模擬詩は對象の詩の狀況と主題、情調を的確に把握するところから出發する。第三に模擬詩の寓意性の問題である。模擬詩は樂府詩と同様、話者と作者が區別されて讀まれねばならないという設定において書かれている。日本の私小説の場合のように作品を傳記的事實の表白であるとして、それを無批判に作品解釋に介入させることは慎重を要することであり、作者と話者の位置關係を測定するに際しては、いくつかの項目を介在させて考えねばならない。だが樂府詩の場合も古人との競作意識のみに支えられて創作されるとは限らず、何らかのしかたで自己を語ろうとするものが確かに存在する。甚しい例が「秋胡詩」を書いて殺されたという丘巨源である。蕭道成の論功行賞のたびに不満をつのらせていたこの

男は、道成に愛されていた蕭鸞が吳興太守に任ぜられるや、「秋胡詩」を書いてこれを譏ったので他の事に託^{かこ}けて誅されたという。〔南齊書〕文學傳〕この樂府詩は今傳わらないので詳しい檢討はできないが、『南齊書』の文脈によれば、彼は憤懣を暗に樂府を假りて託したのであり、それが發覺して（恐らく表向きには樂府を理由に斷罪するわけにゆかず、別件によって）殺されたというのである。また模擬詩においても、例えば江淹の「效阮公詩十五首」〔江文通集〕卷三）は自ら「自序」（同、卷十）で、建平王の舉兵を諫めて納れられず、「淹知禍機之將發、又賦詩十五首、略明性命之理、因以爲諷。」と事情を明らかにしているように、諷諫性の顯著な作品であり、激怒した王によって彼は吳興の令に左遷されたのであった。こういう寓意性は『詩經』の解釋學以來すでに傳統あるものであり、この極めて強い傳統のもとで作者讀者ともにその可能性を鍛練してきた。表面の文脈と寓意の文脈とが破綻なく完結している作品が深奥な興趣として受け入れられ、この全き二重性が諷諭、詠懷などの寓意的意圖に有効性を保證するのである。

こうしたことから、先行の作品に模擬するとしながら、或いはそれによって、その中に寓意的意圖を包攝する可能性をもち、享受する側にも寓意的解釋の餘地を保證するという性格を、模擬詩に認めてよいであろう。

以上の諸性格は模擬詩のもつ基本的な側面であるが、個々の作品にはまた多様な問題をはらんでおり、以下突出した作品——陸機「擬古詩」、謝靈運「擬魏太子鄴中集詩」、江淹「雜體詩」——について個別に即して考察してゆきたい。

二 陸機擬古詩

西晉以後、擬古或いは擬古詩と題する模擬詩が作られてゆくが、その先鞭をなすのが陸機である。『文選』に十二首(卷三十)収録し、許文雨氏の「鍾嶸詩品」(『文論講疏』所收)の指摘によって更に二首(「駕言出北闕」篇、「遼遊出西城」篇)を加えることができ、鍾嶸の言う十四首がすべて確認できる。これらの「擬古詩」が、入洛後に書かれたことはほぼ間違いない¹⁰⁾。陸機が故國の敗戦にともなつて吳から上洛した太康末という時期は、彼の生涯においても文

學においても分水嶺としての決定的な意味をもっている。

虞魏顧陸という吳における屈指の名家の出身であり、晉との戦いを一武將として闘つた身でありながら、太康元年(280)吳が滅ぶや十年の郷里閉居の後召し出されるのだが、亡國敗軍の將ながら誇り高かつた彼にとつて洛陽は堪え難いことの多い環境であつた。入洛後の作品にはそれを反映した強い望郷孤獨の情が漂うのを特徴とする。公けにしがたい、しかも發せずにはいられない心情が、露わに表出されることなく、深い憂悶として陰影を落としている。いま上段に陸機の作、下段に模擬の對象作たる古詩を擧げる。

(古詩其一)

悠悠行邁遠	行行重行行
戚戚憂思深	與君生別離
此思亦何思	相去萬餘里
思君徽與音	各在天一涯
音徽日夜離	道路阻且長
緬邈若飛沈	會面安可知
王鮪懷河岫	胡馬依北風

晨風思北林 越鳥巢南枝

遊子眇天末 相去日已遠

還期不可尋 衣帶日已緩

驚鷗蹇反信 浮雲蔽白日

歸雲難寄音 遊子不顧反

佇立想萬里 思君令人老

沈憂萃我心 歲月忽已晚

攬衣有餘帶 棄捐勿復道

循形不盈衿 努力加餐飯

去去遺情累

安處撫清琴

悠悠として行過は遠く

戚戚として憂思は深し

此の思ひ 亦た何の思ひぞ

君が徽すがたと音こゑを思ふ

音と徽 日夜に離れ

緬邈として飛べると沈めるが若し

六朝模擬詩小考(衣川)

王鮪は河の鮠すまかを懐かしみ

晨風は北の林を思ふ

遊子 天末に眇はるかなり

還る期 尋ぬ可からず

驚鷗は反信まきめを蹇はやてげ

歸雲は音を寄せ難し

佇立して萬里を想へば

沈憂 我が心に萃あつまる

衣を攬とれば餘れる帶有り

形かたちを循なづれば衿に盈たず

去去 情累いさいごを遺すて

安處して清琴を撫かたなでむ

右に掲げた古詩「行行重行行」篇は運命によって翻弄され生別離の悲哀を余儀なくされる古詩の世界を象徴的に形象した篇であり、これに模擬した陸機の作はほぼ忠實に意を汲み取っていると言えるが、表現においては宛然「文賦」の主張(30)参照)を實踐する實驗場のごとくである。同様

の表現を極力避け、新しい表現を求めようとしている。そうして定着した詩句は、却って「赴洛道中作」「贈從兄車騎」「悲哉行」などのいづれも望郷、客遊の哀しみをうたった詩と措辭、それを支える情調を共通にする。顯著な例を示せば、「行行遂已遠、野塗曠無人」「悲情觸物感、沈思

鬱纏綿、佇立望故鄉、顧影悽自憐」(「赴洛中作」其二)「傷哉客遊士、憂思一何深」「寤寐多遠念、緬然若飛沈」(「悲哉行」という形象である。模擬詩が對象の主題を承け繼いでいるのだから、これは當然といえは當然なのだが、しかしその中の「王鮪懷河岫」のような典故のもつイメージを陸機の實人生と重ねてみると、哀れな自畫像に映るのを禁じえない。これは南方の山穴から黄河に出たところ陽光に眩み、アップアップしているのを捕えられた大魚なのである。¹²⁾

上洛後の洛陽生活は『世說新語』に散見する逸話が傳へるごとく、甚だ意に滿たない境遇にあり、賈誼の二十四友に加わっていたけれども、そこは文學上の同志的結合とは程遠い、「要路の津」を求めめる態度を露骨なまでに示す集

團にすぎなかった。

「擬今日良宴會」は古詩の枠組みに沿った模擬を行ってはいるが、その宴の雰圍氣には、昔鄴都を中心に繰り広げられた建安の文人たちのイメージが濃厚に漂う詩である。

(古詩其四)

閒夜命歡友	今日良宴會
置酒迎風館	歡樂難具陳
齊童梁父吟	彈箏奮逸響
秦娥張女彈	新聲妙入神
哀音繞棟宇	令德唱高言
遺響入雲漢	識曲聽其真
四座咸同志	齊心同所願
羽觴不可算	含意俱未申
高談一何綺	人生寄一世
蔚若朝霞爛	奄忽若飈塵
人生無幾何	何不策高足
爲樂常苦晏	先據要路津

譬彼伺晨鳥 無爲守窮賤

揚聲當及旦 轆軻長苦辛

曷爲恒憂苦

守此貧與賤

聲を揚ぐることに當に且に及ぶべし

曷なんす爲れぞ恒に憂ひ苦しみて

此の貧と賤を守らむ

閑夜 歡友を命び

迎風館に置酒す

齊の童 梁父の吟

秦の娥 張女の彈

哀音は棟宇を繞り

遺響は雲漢に入る

四座 威な志を同じうし

羽觴 算ふる可からず

高談 一に何ぞ綺なる

蔚として朝霞の爛かなるが若し

人生 幾何も無し

樂しみを爲すこと 常に晏きに苦しむ

譬へば彼の晨を伺ふ鳥のごとく

「迎風館」は曹植「贈徐幹」(『文選』卷二十四)に「文昌鬱雲興、迎風高中天」(李善引地理書云、迎風館在鄴)とうた

われる、建安文人たちが行遊した舞臺を指す。そうした設定において見たとき、「四座咸同志、羽觴不可算」は古詩

の「齊心同所願、含意俱未申」(李善云、所願謂富貴也)の單なる置き換えではない様相を帯びてくる。そしてそれは、

「高談一何綺、蔚若朝霞爛」という詩句のもつふくらみによって、さらにあるひとつのイメージを結ぶ。つまり、

これらの詩句に對して建安文人たちの先行類似句、孔融の「高談滿四座、一日傾千觴」(失題、『古詩紀』漢三)、曹丕

の「高談娛心、哀箏順耳」(與朝歌令吳質書『文選』卷四十二)、劉楨の「金樽含甘醴、羽觴行無方」(贈五官中郎將其一『文

選』卷二十三)などを挙げれば、そこには、富貴を一途に願う古詩の「同志」たちではなく、建安文人たちの宴を彷彿

させる。次の「人生無幾何、爲樂常苦晏」は古詩や建安詩の民歌的部分にありふれた發想だが（曹丕「大牆上蒿行」樂未央、爲樂常苦遲『樂府詩集』卷三十九）慷慨をうたった曹操「短歌行」の「對酒當歌、人生幾何、譬如朝露、去日苦多」(『文選』卷二十七)が思い出される。また末二句「曷爲恒憂苦、守此貧與賤」は古詩と意味は同様だが、曹植の「願念蓬室士、貧賤誠足憐」(『贈徐幹』『文選』卷二十四)が意識にあつたとすれば、この詩はまことに古詩に建安風を重ねていると見なければなるまい。人生の無常感から歡樂へと傾斜し、或いは富貴榮達へと上昇する古詩の側面に對して、建安の文人たちが持った幸福な交友を置いているところに陸機の意識(或いは願望)を讀みとることができるところではなからうか。陸機が二十四友の座にもこの古詩と同じものを見たとは斷言できぬが、洛陽での知己の少ない孤獨な心境の反映であつたかもしれない。陸機は樂府詩も多く書いている。模擬詩にしろ樂府詩にしろ、表面は虚構を旨とする。古辭や古詩の中に自らの經驗を讀みとり、そのヴァリエーションであることによって、祕めやかな感情を盛る器

としての、虚構の裡に潛む密やかなリアリティに彼は着目していたのではなかつたらうか。⁴⁴

孫月峰(『文選集評』卷三十引)は陸機の擬古詩について、「擬古自士衡始、句倣字倣如臨帖然、然又戒太似、所以用心最苦、大抵貴得其神、若擬古則詩道自進」と言い、文學上の意義を評價している。また「擬行行重行行」詩の結句を評して「撫琴」稍作意、不若「加餐」渾妙」と指摘する。

(朱自清「古詩十九首釋」によれば「強飯」「加餐」は慰勉する意味の漢代の通行語の由、『漢書』外戚傳孝武衛皇后に用例あり)このことは陸機の擬古詩全般に亘って言えることだが、古詩のこういう最も卑俗な部分に對しては意識的な對應をしている。例えば「何不策高足、先據要路津」(『今日良宴會』篇)「昔爲倡家女、今爲蕩子婦」(『青青河畔草』篇)の部分に對しては模擬せず、「誰謂我無憂、積念發狂痴」(『蘭若生春陽』篇)に對しては「引領望天末、譬彼向陽翹」と間接的に表現し、「思爲雙飛燕、銜泥巢君屋」(『東城高且長』篇)に對しては「思爲河曲鳥、雙遊澧水湄」と典雅なイメージに變容させる類であり、また『詩經』の語を

多用し、對句構成を緊密にするのは、彼が詩語としての美的効果や古典性に十分考慮を拂っていたことを示しているであろう。多岐に亘って文學創造の「用心」を論じた「文賦」にはこれらのことも周到に定式化されている。いわく、言語表現の美を尊ぶべきこと、(第六章「其會意也尙巧、其遺言也貴妍」)いわく、率直な感情表白も典雅なるべきこと、(第十四章「寤防露與桑間、又雖悲而不雅」)と。

なお、さきの「強飯」で思いあわされるのは藤原俊成である。『古來風躰抄』で『萬葉集』の「家にあれば筥に盛る飯を草枕旅にしあれば椎の葉に盛る」を評して、「飯などいふ事は、此ころの人も、うちくには知りたれど、歌などにはよむべくもあらねど、昔の人は心のけはれなくて、かくよみけるなるべし」と、「け」即ち日常的俗語と「はれ」即ち公的な或いは古典的な語彙とを峻別しようとした態度は、陸機に極めて似ており、これをもって陸機の「用心」の説明に代えうるであろう。

三 謝靈運擬魏太子鄴中集詩

謝靈運の「擬魏太子鄴中集詩八首」は、魏太子(曹丕)の序と「魏太子」「王粲」「陳琳」「徐幹」「劉楨」「應瑒」「阮瑀」「平原侯植(曹植)」の八詩、並びに「王粲」以下に附された小序から成る組詩である。謝靈運の題にいう「鄴中の集の詩」とは、序によれば、嘗て交友をもった人々が殆んど死に絶えようとした時期に、鄴都で共に心を許しあい遊んだ昔日を回想し、そのときの詩を輯めたのがこれに當るようである。それが黃節氏の指摘するように「魏文帝集序」(『初學記』卷十)にみえる「爲太子時、北園及東閣講堂並賦詩、命王粲・劉楨・阮瑀・應瑒等同作」という詩であったかは即斷できないが、建安文人に同題の詩賦が多く残されているところから、こうした状況は存在したであろう。序は曹丕の「與吳質書」(『文選』卷四十二)とよく對應する。「不誣方將、庶必賢於今日爾」(序)は「諸子但爲未及古人、自一時之雋也、今之存者、已不逮矣、後生可畏、來者難誣」(書)に、「歲月如流、零落將盡、撰

文懷人、感往增愴」(序)は「何圖數年之間零落略盡、言之傷心、頃撰其遺文、都爲一集」(書)に合致する。されば曹丕が收集編纂した「一集」の中に、ここにいう「鄴中集詩」が收められていたのだろうか。また小序を附すのは、繁欽「與魏文帝牋」(『文選』卷四十)陳琳「爲曹洪與魏文帝書」(『文選』卷四十一)の李善注に引く「文帝集序」にみえるような解説が附された構成であったのだろうか。しかし、謝靈運が模擬したと想定される建安文人たちの詩は現存しない。いや、實のところ本當に存在したかも極めて疑わしい。序にいう「建安末」には曹植以外の六人は既に世を去っていたのが史實である。また曹丕を「魏太子」とし、曹植を「平原侯」(建安十六年〜十八年)とするのが年代的に合わないのは、後の官位で表示するありふれた齟齬であるとしても、「平原侯植」の小序には「然頗有愛生之嗟」と記し、その詩にも「願以黃髮期、養生念將老」というなど、確實に黃初以後の生活感情を含んでおり、「建安末」の詩とする設定との懸隔がありすぎる。さらに八首の詩について、嚴羽が「雖謝康樂擬鄴中諸子之詩、亦氣象不類」

『滄浪詩話』詩評」と言い、『文選集評』(卷三十)に引く諸家の評に舉って「不似」「不甚似」などと言う印象的批評がなされるのは、やはり一目でそれが瞭解される部分があるからであろう。これらのことから、模擬の對象としての「鄴中集詩」が實際に存在して、その一詩ごとに擬したのではないことを予想させる。史實に符合しないという點では、ちょうど謝惠連(『雪賦』)謝莊(『月賦』)とともに『文選』卷十三などが、賦の創作において自己の表現のために、年代や人物の配置に無頓着なまま時代設定を假りて創作する場合に類似する。この類推が許されるならば、謝靈運は魏太子を中心に著名な文人たちが幸福感に浸りつつ詩を詠じあったという、ありうべき理想的な状況を假構した可能性が強く、たとえ八人の「鄴中集詩」が存在したとしても、それらは謝靈運の擬詩とは趣を異にしたものであったろうと思われる。序に「朝遊夕讌、究歡愉之極、天下良辰美景、賞心樂事、四者難并、今昆弟友朋二三諸彦、共盡之矣」と魏太子たちの状況を表現するが、これこそ謝靈運自身が庶幾した理想的な場に他ならず、就中「賞心」の語は恐らく

彼が創出し、自然鑑賞またはその態度を同じくする知己の意味に好んで用いた言葉であった。¹⁸⁾

このように假構性の強い創作的な作品であるとするならば、序にみえる「古來此娛、書籍未見。何者楚襄王時有宋玉唐景、梁孝王時有鄒枚嚴馬、遊者美矣、而其主不文。漢武帝徐樂才備應對之能、而雄猜多忌、豈獲晤言之適」という部分に漂う君主に向けられた棘のある口吻は、何かを言わんとする姿勢であるように思われる。明確に指摘することは難しいが、恐らくは政治參與の意志を抱きながら文才においてしか評價されなかつた憤懣を暗に示しているのであろう。¹⁹⁾

以下、詩について検討してみる。

魏太子

百川赴巨海 百川 巨海に赴き

衆星環北辰 衆星 北辰を環る^{めぐる}

照灼爛霄漢 照灼として霄漢に爛き^{おほざらかがや}

遙裔起長津 遙裔として長津を起こす

六朝模擬詩小考(衣川)

5 天地中横潰 天地 中ごろ横潰し

家王拯生民 家王 生民を拯へり^{すく}

區宇既滌蕩 區宇 既に滌蕩せられ

羣英必來臻 羣英 必く來り臻れり^{こむとま}

忝此欽賢性 此の賢を欽む性を忝け^{つたし}

10 由來常懷仁 由來 常に仁を懷ふ

況值衆君子 況んや衆君子に値ひて

傾心隆日新 心を傾け日新を隆にするをや^{さかん}

論物靡浮說 物を論じては浮説なく

析理實敷陳 理を析ちては實に敷陳す

15 羅縷豈闕辭 羅縷 豈に辭を闕かむや

窈窕究天人 窈窕として天人を究む

澄觴滿金疊 澄める觴は金疊に滿ち^{しやう}

連榻設華茵 連ねし榻に華茵を設く

急絃動飛聽 急絃 飛聽を動かし

20 清歌拂梁塵 清歌 梁塵を拂ふ

何言相遇易 何ぞ言はむ 相遇ふこと易しと

此歡信可珍 此の歡 信に珍とすべし

* 黄侃云、必與畢同(『文選黄氏學』)

擬作としている以上、より意識的に語句を襲用し構成しているのだから材源を確かめておく必要がある。後漢末の動亂が曹操の出現により魏へと收斂してゆくことを叙べた壯大な前八句の趣は、現存する曹丕の詩に見出し難いが、曹植の「吾王於是設天網以該之、頌八紘以掩之、今悉集茲國矣」(與楊德祖書『文選』卷四十二)あたりから發想されて、宴會を統べる太子の立場で表現されたようだ。建安文人の現存する詩句から跡づけると、11 12句は曹丕の「穆穆衆君子、和合同康樂」(於讎作)、13 16句は吳質「發言抗論、窮理盡微」(與魏太子賡『文選』卷四十)を踏まえ、17 20句の宴の描寫は王粲「旨酒盈金罍」(公讎詩『文選』卷二十)、曹丕「行則連輿、止則接席」(與吳質書『文選』卷四十二)「清歌發妙曲」(孟津詩『類聚』卷二十八)「絃歌奏新曲、游響拂丹梁」(於讎作『初學記』卷十四)、また21句は「別日何易會日難」(燕歌行『文選』卷二十七)を踏まえて表現されたに違いない。謝靈運の擬詩は當の曹丕を主とし、さらに他の建

安文人の詩句や發想を隨處に取り込んで構成するが、末六句の昂揚した宴席の雰圍氣の部分においてしか曹丕らしさを感じさせぬのは、そこに至るまでの大局的な發想、哲理的表現を含むゆえであろう。謝靈運は「析理」の語を「石壁立招提精舍詩」(『類聚』卷七十六)に「禪室栖空觀、講宇析妙理」と佛教教理の議論の意味に用いている。鍾嶸は曹丕の樂府についてであるが、「率皆鄙直如偶語」と觀察している。「魏太子」に表現されているのは、廣い視野を持つて時代を掌握統御し、諸賢の才能を見抜いて庇護し、自らもまたその交友をかけがえのないものとして参加しようとする、宴の主催者たるに相應しい理想化された太子の姿である。勿論これは謝靈運の手にかかる理想像に他ならぬ。

王粲 家本秦川貴公子孫、遭亂流寓、自傷情多。

幽厲昔崩亂 幽厲 昔崩亂し

桓靈今板蕩 桓靈 今板蕩す

伊洛既燎燵 伊洛 既に燎燵かれ

函嶠沒無象 函嶠 沒して象なし

5 整裝辭秦川 裝ひを整へて秦川を辭し

秣馬赴楚壤 馬に秣ひて楚壤に赴けり

沮漳自可美 沮漳は自ら美とすべきも

客心非外獎 客心 外獎にあらざりき

常歎詩人言 常に詩人の言を歎けり

10 式微何由往 式微 何に由りてか往かむ

上宰奉皇靈 上宰 皇靈を奉じ

侯伯咸宗長 侯伯 咸く宗長とせり

雲騎亂漢南 雲騎 漢南を亂め

紀鄴皆掃盪 紀鄴 皆掃盪せり

15 排霧屬盛明 霧を排きて盛明に屬ひ

披雲對清朗 雲を披きて清朗に對へり

慶泰欲重疊 慶泰 重疊らむとして

公子特先賞 公子 特り先づ賞せり

不謂息肩願 謂はざりき 肩を息む願ひの

20 一旦值明兩 一旦にして明兩に値はむとは

竝載遊鄴京 載を竝べて鄴京に遊び

六朝模擬詩小考（衣川）

方舟汎河廣 舟を方べて河の廣きに汎ぶ

綢繆清讌娛 綢繆たり 清讌の娛

寂寥梁棟響 寂寥たり 梁棟の響

25 既作長夜飲 既に長夜の飲を作す

豈顧乘日養 豈に乘日の養を顧みむや

二十句までの長い履歷的な述懐は、王粲の詩賦にみえる自序的な部分を資料に構成されている。この桁外れの長さは王粲が自らを語ることの多い人であり、小序の「自傷情多」とする規定に見合うものである。八句までは「西京亂無象、豺虎方遺患、復棄中國去、遠身適荆蠻」（七哀詩其一）『文選』卷二十三、「天降喪亂、靡國不夷、我暨我友、自彼京師、……遷于荆楚、在漳之湄」（贈士孫文始、同卷）、「荆蠻非我鄉、何爲久滯淫」（七哀詩其二、同）、「雖信美而非吾土兮、曾何足以少留」（登樓賦、同卷十一）などに依りつつ構成されている。21句は「同乘竝載、以遊後園」（曹丕、與朝歌令吳質書、同卷四十二）を承けているだろう。9・10句の「常歎詩人言、式微何由往」という『詩經』の詩人を引きあい

に出す表現は王粲に類見するものであり、謝靈運はこれに着眼して採用する配慮をしたのである。しかし22句「方舟」の語は、王粲詩にあつては夕暮と結びついて漂泊や従軍のよるべない寂しさをイメージする重要な語であるが、謝靈運が遊興の具としてはいささか當を失した措置と言わざるを得ない。

以下「陳琳」、「徐幹」、「劉楨」、「應瑒」、「阮瑀」詩はいづれも前半に出自、曹操幕下に降るまでの動亂下の閨歴、曹操父子の愛顧への謝意、僚友への信頼を詠じ、盛大な宴の描寫へと續けるパターンをとる。その手法は「魏太子」
 「王粲」詩で見たように、各人の遍歴を地名を雜えつつ自傳風に描き、當人の詩文や曹丕、曹植、吳質らの書翰に回想された遊宴談論の情景を採り入れて構成するというものである。そしておおむね末二句ないし四句に、小序の規定に沿った感慨を述べさせているのだが、そこにはこの嘉會を賞揚しつつも、個々の詩人の感慨に示された(託された)感情に微妙な幅のあることに氣づく。これを整理すれば、まず「魏太子」で、「何言相遇易、此歡信可珍」とこの嘉

會を褒め讃えたのに對し、「王粲」「陳琳」「應瑒」はそれぞれこの方向に「既作長夜飲、豈願乘日養」王粲「且盡一日娛、莫知古來惑」陳琳「傾軀無遺慮、在心良已敘」應瑒と翼贊の立場をとり、それが「阮瑀」に至つて「自從食滌來、唯見今日美」と感極まった總括で結ばれる。ところが「劉楨」では「唯淡肅肅翰、繽紛辰高冥」と鞅絆からの自由(あるいは高位)を望む方向を示し、「徐幹」では「華屋非蓬居、時鬢豈余匹、中飲顧昔心、悵焉若有失」と果さざりし隱逸の志を漏らして現在酣の宴とは逆方向への傾斜を見せる。さらに「平原侯植」では「中山不知醉、飲德方覺飽、願以黃髮期、養生念將老」と言う。「中山の銘酒で酔うのではない、主宰者である太子の徳望に接して初めて酔えたのだ。」と。太子の位をめぐって曹丕曹植雙方(とくに側近)の間に熾烈な確執があつたこと、曹操の死後即位した文帝が肉親に酷薄であつたことを知るならば、これは皮肉以外の何者であろう。「中山」の語は左思「魏都賦」
 《文選》卷六)にいう「醇酎中山、流湏千日」の美酒を指すが、こういう情況を思うときもう一つの話、漢の中山王

勝の故事に氣づく。何焯は「此用漢書中山王勝事」(『義門讀書記』文選卷三)と指摘している。すなわち『漢書』によれば、武帝が即位した時、さきの吳楚七國の亂の苦い教訓から過酷な藩王勢力削減策を用いたところ、誣告による仕置が多發した。これに堪えかねた中山王勝はある宴席で音楽に涙してその措置の非を切々と訴え、その哀切さが武帝を動かし、以後諸王は禮遇されるようになったという。これは曹植「自誠令」(『黄初六年』、『文館詞林』卷六百九十五、但誠誤作惑)にいう狀況とまさに同一である。末二句も黄初四年の「贈白馬王彪」詩(『文選』卷二十四)を踏まえ、また小序にいう「公子不及世事、但美遨遊、然頗有憂生之嗟」は、前二句が文帝即位以前の生活態度を、後句は黄初以後を明らかに指して、謝靈運はそこまで踏み込んで構想していたのである。

このように、謝靈運の模擬詩は魏太子を中心に鄴都において繰り広げられた建安文人たちの同志的交流、心を許しあった活潑な批評談論の雰圍氣を讚美するという基本的な枠組の中で、或いは歡樂を盡くさんとし、或いは自由(榮

六朝模擬詩小考(衣川)

達)を願ひ、或いは隱逸へ傾斜し、また徳政を切望する。これを作者謝靈運の複雑な心境が複雑なまま反映されて見ると見るのは短絡に過ぎるであろうか。この模擬詩が假構性の強いものであつてみれば、序に窺える口吻とも并せて、十分にその可能性があると考えられる。これらの願望は謝靈運自身が平生抱え込んでいた心的矛盾の諸側面とかなり程度符合するものであつた。

性奢豪、車服鮮麗、衣裳器物、多改舊制。(『宋書』本傳)
(生まれつき贅澤ごのみで、派手な車や衣服を用いた。日常利用する衣裳や器物も、昔より定められた枠をやぶるものであつた。)

自謂才能宜參權要、既不見知、常懷憤憤。(同)(自分で
は權力の中樞に參與すべき才能を自負していたが、認められなかつたので、いつも憤懣を抱いていた。)

靈運以疾東歸、而遊娛宴集、以夜續晝。(同)(病氣を口
實に官を去つて始寧に歸つたが、一日中遊びまわつたり宴會を開

いたりしていた。)

豈伊川途念、宿心愧將別、彼美丘園道、喟然傷薄劣。(九日從宋公戲馬臺集送孔令詩『文選』卷二十) (歸る孔令と送る私が隔たってしまうという思いだけではない、私も前々から同じ願いを抱えていることが、別れにあたって愧ずかしい。孔令のとても美しい隠逸の道に對し、みずからの不甲斐なさがかなしく思われる。)

東髮懷耿介、逐物遂推遷、違志似如昨、二紀及茲年。(過始寧墅、『文選』卷二十六) (幼い頃から世俗と妥協しまいと志を抱いていたが、世事に不ずんで過ごしてしまった。志に背いて仕官したのはつい昨日のことに思えるが、はや二十數年にもなってしまった。)

平生協幽期、淪蹟困微弱、久露干祿請、始果遠遊諾。(富春渚、同) (かねてより隠逸の志をかなえようとは思っていたが、弱い心に躓いてばかりだった。永らく俸祿のことに齟齬していたが、いまやっと旅立ちの許しを得た。)

こうした矛盾葛藤の姿が現われた恰好の逸話がここにある。

謝靈運好戴曲柄笠。孔隱士謂曰、卿欲希心高遠、何不能遺曲蓋之貌。謝答曰、將不畏影者未能忘懷。『世說新語』

言語篇)

(謝靈運は(高貴な人のかぶる)曲柄笠を好んでかぶっていたが、隱者の孔淳之が「きみは心の高遠を願いながら、どうしてそんな曲がった蓋の恰好を捨てきれないのかね」と問うと、かれは「影を氣にする者はものに囚われている、ということか」と答えた。)

言語應酬の面白さは『莊子』漁父篇の話(漁父が孔子を諭して、自分の影のノイローゼになった男が影から走り逃れようとして力竭きて死んだという寓話を引き、執心を離れよと言った)を踏まえて、自らの超俗の意志と世俗性の奇妙な同居を自虐的に表現したところにあるだろう。

葛藤し揺れ動く心境、それはかつて阮籍が一連の詠懷詩に託したように、連作の形で潜ませるのに相應しかったの

ではあるまいか。「賞心」の友を求める願望と想像力が建安の文人集團に對象を見出して模擬詩を作るといふ虚構を構想し、そこに自己の心境の多様な側面を對象文人に即して語つたのだと理解することができよう。

四 江淹雜體詩三十首^㉑

江淹以前の模擬詩において附隨的な位置にあつた批評的側面は「雜體詩三十首」に至つて正面におし出され、展開する。彼は漢の古詩から宋末（？）湯惠休に至る詩史の中から山巔を形成する三十家を選び、その個人様式を學んで三十首の模擬詩を作つた。そして個人様式を時代的に並列することによつて時代様式の變遷をも表わそうとしたのである。自らもその序に敍べるところと純粹に文學史的關心から企圖された、いわば詩的遺産目錄であつた。「雜體詩」序は不完全ながらある程度文學史的な鳥瞰をもつており、當時の文學論を参照しながら讀むことができる。

夫楚風漢謠、既非一骨、魏製晉造、固亦二體。譬猶藍朱成彩、雜錯之變無窮、宮商爲音、靡曼之態不極。故蛾眉詎同貌、而俱動於魂、芳草寧共氣、而皆悅於魄、其不然歟。

（およそ戰國楚の文學と漢代の文學が同じものでない以上、魏と晉の文學もまた異なるものである。それは譬えてみれば、藍や朱などのいるどりが雜りあつてさまざまな色の變化をみせ、宮商などの音階が組み合わされて限りなく美しい音色となるようなものである。もとより美女のタイプは違つても、それぞれに心ときめくし、香ぐわしい花においては種々あつても、みな心たのしませる。そうではあるまいか。）

序の冒頭から詩の變化をいう。//時代の作風が異なること、それは正統性の如何を問わず變化してゆくのが事實なのである。しかも秀でた作品は人を感動させる”と説く。序の後段には五言詩の歴史にふれて、

然五言之興、諒非復古、但關西鄴下、既已罕同、河外

江南、頗爲異法。故玄黃經緯之辨、金碧沉浮之殊、僕以爲亦各具美兼善而已。⁶⁰⁾（そして、五言詩が興つたのはそう古いことではないが、それでも時代によって、西漢と曹魏、西晉と東晉以後とは詩法を異にする。ゆえにそれらの作品には彩飾・組織・珍貴・輕重の違いはあるが、それぞれに美を備え善を兼ね持っているとなつたしは思う。）

という、變化しながらもいづれ劣らず素晴らしいとする認識は、いわゆる「新變」（『南齊書』文學傳論、若無新變、不能代雄）を積極的に評價する態度と軌を一にする。江淹は齊初の建元二年（480）と永明初（483）に史職を掌り、國史の構想を立てていた。『南齊書』文學檀超傳にその詳細が見える。恐らくその故であろう、蕭子顯『南齊書』文學傳論は甚だ似た認識に支えられている。歴代作家を裁斷しない態度、⁶¹⁾「朱」も「藍」もよしとする態度（蕭子顯「朱藍共妍、不相祖述」）など、江淹を承け繼ぐものであろうと思われる。序の中段には、

至於世之諸賢、各滯所迷、莫不論甘而忌辛、好丹則非素。豈所謂通方廣恕、好遠兼愛者哉。（世の論者たちとぎたら、自分の意見に固執する偏つた嗜好の持ち主ばかりだ。これではいわゆるすべてに通じ、大きな度量を持った者といえるだろうか。）

と述べて偏狹な主觀的批評の横行を批判する。が、彼はそこから客觀的評價の基準を提示する作業へと進めるのではなく、

今作卅詩、效其文體。雖不足品藻淵流、庶亦無乖於商榷云爾。（いま、それぞれの個人様式をまねて三十首の詩を作った。系統を品評するのに十分ではないが、見當ちがいの模擬でなくありたいものだ。）

すなわち、模擬詩によって歴代各詩人の特徴を客觀的に提示する方法を採ったわけである。批評にあつては先ず詩人の特徴（個人様式）を曇りない眼で抽出しなければならぬ、

議論を加えるのはそれが正しく成就されてからだ、と言わんとすることくである。ここから先は文學理論家の域であって、劉勰は、「鋪觀列代、而情變之數可監、撮舉同異、而綱領之要可明矣」(『文心雕龍』明詩篇)として、詩の歴史的發展を究明すべく「通變篇」の理論的探究へ向かった。一方、鍾嶸は先人の理論を「皆就文體、而不顯優劣」、「諸英志錄、並義存文、曾無品第」(『詩品』序)として歎りず、ランク評價を試みたのであった。三者が對象とした詩人の範圍はおおむね一致する。ただ江淹は「僕以爲亦各具美兼善而已」と各家ひとしなみに優れたものとするが、劉勰、鍾嶸はそうではない。ことに玄言詩に對する評價では、兩者は江淹が三十家を含めた孫綽、許詢にも觸れはするが、それは貶辭の文脈においてであった。玄言詩を詩情の退潮の姿であるとするのがこの時代のおおむねの認識であったが、江淹は晉の渡江前後に玄言詩が一世を風靡したという詩史における「新變」の實態を無視することなく、その詩風を代表する二家を遺産繼承目錄に加えたのであった。

「雜體詩」序によって江淹が詩人の個人様式を客觀的に

六朝模擬詩小考(衣川)

抽出して模擬詩を成したことが理解できるが、それは嚴羽が「擬古惟江文通最長、擬淵明似淵明、擬康樂似康樂、擬左思似左思、擬郭璞似郭璞、獨擬李都尉一首、不似西漢耳」(『滄浪詩話』詩評)と指摘することく、殆んどの詩において一應の成果を収めていると言える。後人をして模擬對象となつた詩人の眞作と見誤ませた多くの例が、却つて江淹の巧みさを立證している。對象詩人の作品中に紛れ込んでいても識別できない、或いは不自然さを感じさせないという出来ばえを示しているのである。

最初の「古離別」。この頃には漢代無名氏の古詩がまとめられていた筈だが、『文選』に十九首をその精華として一括し、その第一首には生別離の悲哀をうたつた「行行重行行」篇を置くごとく、それは古詩の世界を代表する主題であった。そういう認識は古詩にみえる發想や語彙の繼承のされ方からもほぼ證明できることである。江淹もこの主題のもとに古詩からの句を多く點綴して作っている。そのことを李善は「江之此製、非直學其文體、而亦兼用其文、故引文爲證。其無文者、乃引他說」と注を施して江淹の態度

を明らかにしている。

「古離別」以外の各詩には詩人名の下に小題を附して、その詩人の作品を代表する主題を明示する形式をとっているが、それには詩題の場合もあり、また個々の題を越えた作品全般から歸納された主題の場合もある。例えば潘岳については「潘黃門述哀」と規定する。潘岳の五言詩の傑作は「悼亡詩三首」(『文選』卷二十三)に違いないが、そしてまた江淹自身もここでは「悼亡詩」に擬作しているのだが、潘岳の最も得意とし、かつ卓越した力量を示したのは「悼亡詩」のみに限らず廣く死者を悼む哀誄のジャンルであったこと(『晉書』潘岳傳、尤善爲哀誄之文)を、これは考慮した結果である。しばらく江淹の模擬の方法を見てみよう。

- 潘黃門述哀 岳
 青春速天機 (悼亡詩其一) 佳再冬謝春、(其三) 曙靈運天機
 素秋馳白日 (其二) 清商應秋至
 美人歸重泉 (其一) 之子歸窮泉

- 悽愴無終畢 (哀永逝文) 聲有止兮哀無終、(同) 悽切兮增歎
 5 殯宮已肅清 (同) 歸反哭兮殯宮、(寡婦賦) 奉虛坐兮肅清
 松柏轉蕭瑟 (哀詩) 長風鼓松柏
 俯仰未能弭 (哀永逝文) 俯仰兮揮淚、(夏侯常侍誄) 前思未弭
 尋念非但一
 撫襟悼寂寞 (其二) 撫襟長歎息
 10 惘然若有失 (其一) 惘恍如或存
 明月入綺窻 (其二) 皎皎照中月、(同) 朗月何麗隴
 髣髴想惠質 (同) 髣髴睹爾容、(思子詩) 追想存髣髴
 消憂非萱草
 永懷寧夢寐 (寡婦賦) 願假夢以通靈、(哀永逝文) 曾寤寐兮不
 夢
 15 夢寐復冥冥 (爲任子成妻作孤女澤蘭哀辭) 音影冥冥
 何由覲爾形 (其二) 髣髴睹爾容
 我慙北海術 (其二) 上慙東門吳、下愧蒙莊子
 爾無帝女靈 (同) 獨無李氏靈
 駕言出遠山 (其三) 駕言陟東阜、望墳思紆軫
 20 徘徊泣松銘 (同) 徘徊墟墓間、欲去復不忍

雨絶無還雲 (哀詩) 雨絶有歸雲

華落豈留英 (皇女詠) 落英凋矣、(悼亡賦) 含芬華之芳烈、 翩

落而從風

日月方代序 (其三) 四節代遷逝

寢興何時平 (其一) 寢息何時忘、(其二) 寢興目存形

青春 天機を速かにし

素秋 白日を馳す

美人は重泉に歸し

悽愴 終畢無し

殯宮 已に肅清にして

松柏 轉た蕭瑟たり

俯仰して未だ弭るる能はず

尋念 但だ一たびのみに非ず

襟を撫でて寂寞を悼み

恍然 失ふこと有るが若し

明月 綺窓に入り

髣髴として蕙質を想ふ

六朝模擬詩小考 (衣川)

憂ひを消すは萱草に非ず

永く懐ひて寧ろ夢寐せむ

夢寐も復た冥冥たり

何に由りてか爾の形を覩む

我は北海の術に慚ぢ

爾に帝女の靈無し

駕して言に遠山に出で

徘徊して松銘に泣す

雨絶えて還雲無く

華落ちて豈に英を留めむや

日月 方に代序す

寢興 何れの時にか平らかならむ

場の設定は一年の喪が明けた、死よりある時期を経た時であること、己の悲しみに焦點を當てた描寫であることも潘岳の「悼亡詩」と同じである。「悼亡詩」は三首構成の連作の形式をとり、冬から春——秋——冬という季節の循環を背景にするが、「述哀」がそれを春から秋に縮めて一

首の中心を秋に据えているのは、秋、落葉、月夜という素材こそ悲哀の情をいや増すからであり、哀傷文の定石であることを心得ているのである。江淹の「述哀」の手法は、

詩の下に掲げた典故から明らかのように、殆んどの發想と詩句をそれら哀傷類から得て埋められていて、それは後世の集句の技法に近いとさえ言える。押韻も「悼亡詩」へ其一と同じく詰まった響きの入聲韻を用い、換韻する處で蟬聯體を使うのはへ其二へ其三に見える技法をまねて

いる。後段17・18句に『列異傳』と「高唐賦」の故事を挿入するのも、「悼亡詩」へ其二に「桓子新論」の故事を踏まえるのと同類である。そうである以上、讀者に似ないという印象を與えぬ筈はない。ただ潘岳は職務に歸らねばならぬ自己の、後ろ髪を牽かれる戀々たる心情を詩に挿む（其一、其三）けれども、ここにはそれを缺くという相違がある。一首としての完結性には抑制が必要なのであろう。

江淹「雜體詩」が缺陷を露呈するのは、實は多様な内容を含む連作形式の詩に對してなのである。「左記室詠史」と左思「詠史詩」〔文選〕卷二十一八首について比較して

みる。

左記室詠史 思

韓公淪賈藥 韓公は賈藥に淪じみ

梅生隱市門 梅生は市門に隱る

百年信在苒 百年 信に苒苒たり

何用苦心魂 何を用てか心魂を苦しめんや

5 當學衛霍將 當に衛霍の將の

建功在河源 功を建つること河源に在りしに學ぶべし

珪組賢君昞 珪組は賢君の昞

青紫明主恩 青紫は明主の恩

終軍才始達 終軍 才 始めて達し

10 賈誼位方尊 賈誼 位 方に尊し

金張服貂冕 金張は貂冕を服け

許史乘華軒 許史は華軒に乗る

王侯貴片議 王侯 片議をも貴び

公卿重一言 公卿 一言をも重んず

15 太平多歡娛 太平のよに歡娛多く

飛蓋東都門 蓋を東都の門に飛す^{くま}

顧念張仲蔚 顧みて念ふ^{かへり} 張仲蔚の

蓬蒿滿中園 蓬蒿 中園に滿つるを

左思の「詠史詩」は複数の歴史人物を一詩に採り入れても、それが自身の感情の吐露という一點にみごとに收斂している。ところが江淹の擬詩は多くの歴史人物の登場によって雑多な感じを興える。さきに韓康、梅福という隱者に對して「百年云云」の批評があり、さらに次の衛青、霍去病、終軍、賈誼に張仲蔚を對比させるのは構成に弛緩を來している。また歴史人物の提示のしかたにおいても、左思とは相反する。5〜8句は「詠史詩」〈其一〉⁸⁷の、功にはやる氣持ちを汲んでいるのだから、衛青、霍去病が匈奴討伐に收めた赫々たる功績によって榮爵を授けられたことのみを言うのは、左思と明らかに異なる。〈其一〉では「功成不受爵、長揖歸田廬」という部分に左思は重點を置くのであり、同じく〈其三〉にも「功成不受賞、高節卓不羣、臨組不肯縲、對珪不肯分、連璽耀前庭、比之猶浮雲」と魯

仲連が爵位を拒絶するところに大いに共鳴しているのだ。

9・10句の終軍、賈誼といえは年若くして燦めくような才氣を發揮し異例の出世を遂げた人である。左思は榮達した人物を引くにもその不遇時代においてであった。〈其七〉⁸⁸

「詠史詩」における表現の特徴は對比法の鮮明さである。

「鬱鬱潤底松、離離山上苗」〈其二〉に象徴されるような、腦裡に焼きつくごとき鮮烈で際立った形象によって、それ以前の詠史詩に抜きん出ている。一詩中の構成においても、貴顯を描くにも必ず貧者と對比させ〈其四〉⁸⁹、高位に就いた人でもそれ以前の逼塞時代に焦點を當て〈其七〉、一時の功によって得た榮達も一時に失われるものと戒める〈其八〉⁹⁰のように、やはり對比の方法で描いている。江淹としてそれらのことを讀みとらなかつた筈はなからう。人物については異なった文脈に置こうとしたのだと思われるが、左思の「詠史詩」は並外れて強烈な個性を示す連作である故に、詩中にしかと位置づけられた人物によるイメージは異文脈を許さない拘束力を持っているのである。對比的構成は江淹もこの手法を採ろうとしたが、餘りにも多くの例を

引きすぎて焦點を曖昧なものにしてしまった。「左記室詠史」が全く似ないのではない。「詠史詩」八首の一見多様な現象を意識しすぎて構成の破綻を招いたのだ。あるいは相互的補完の連作の世界に對して一首の擬作は質の薄いものになってしまったのだとも言える。連作の作り出す世界を蔽い得ない——これは「雜體詩」の他の詩についても當嵌まることである。

「阮步兵詠懷」と「詠懷詩」八十二首。江淹の擬詩は、かつて明刊『阮嗣宗集』の「詠懷詩」に混入したことが暗示するように、連作の中の一詩としての位置は占め得るが、連作全體と對峙するだけの力を持たない。⁴¹⁾

また「郭弘農遊仙」と郭璞「遊仙詩」十四首の場合も同様である。十四首の中でその本質とすべきは、〈其五〉⁴²⁾に典型的に現われるような、現實を超越したいと切望しながら、現實の羈絆から自由ではあり得ないということの悲歎であろう。郭璞の眼はただ神仙界のみに向けられているのではなく、神仙を得られぬおのれ自身に向けられているのであって、「乃是坎壈詠懷」（鍾嶸）「文多自敘」（李善）

と評される所以である。しかし十四首の中には神仙界を描き、單なる神仙への羨慕を主題とする篇も存在し、一般の遊仙詩（例えば何劭『文選』卷二十一）と同質の側面も備えている。劉勰がその面をも「（景純）仙篇亦飄飄而凌雲矣」（『文心雕龍』才略篇）と讚美し、李善が遊仙詩らしからぬ趣を「見非前識、良有以哉」（『文選』卷二十一）と過去の非難に觸れるのは、郭璞「遊仙詩」に對する評價が完全に分かれていたことを示している。江淹の擬作はまさにこの神仙の趣を貴ぶ系列に屬するものであり、評價の一方に荷擔した解釋を採ったものであった。故に遊仙詩の一席は占め得るが代表たり得ないであろう。

さきの潘岳の「悼亡詩」も三首とはいえ連作であったが、「述哀」が破綻を見せないのは何故か。それは背景になる四季の景物は異なっても所詮循環の世界であり、こみあげてくる悲しみの感情は、時を経て「念此如昨日」〈其三〉という同じ悲歎の世界に留まったものであった。故に江淹は「青春速天機、素秋馳白日、……日月方代序、寢興何時平」と秋を中心にした一首に包括できたのである。あるい

は潘岳の「人生不能行樂、死何以虛諡爲」(竿賦『文選』卷十八)という現實的な處世が、江淹の「人生當適性爲樂、

安能精意苦心、求身後之名哉」(自序『江文通集』卷十)という人生觀と肌が合い、それがこの擬作にも及んだのだろうか。そういえば左思や郭璞の慷慨から身を駭しているのも、あるいは江淹の意識されざる態度であったのかも知れない。

そういう微妙なずれは三十首の詩にある程度指摘可能ではあろう。そのずれは「似る」と評することを妨げはしないが、蓋し詩を読むということは解釋なのであって、彼の讀みという但し書きのつくのも免れ得ないことだろう。その意味でこの三十首もまた江淹の、各々の詩あるいは詩人に對する解釋(すなわち個人様式の探究)を詩形式によって示したものであった。總集を編むという行爲ではなく、擬作によって詩的遺産の繼承目錄を作ったということは、江淹が詩人として詩史に參畫しようとした試みでもあったことを表わしている。

四 結 語

『文章流別集』や『文選』などの總集の編纂は文學のある程度の成熟を背景に、文學遺産の總括を企圖して行われる事業であるが、文體ジャンル、主題、素材、樂府題などに類別され、歴史的に排列された作品を讀んでゆくと、個々の作品が個的な状況の中で書かれながらも、歴史的な繋がりをもち、舊から新へと繼起的連鎖的に展開していることが讀みとれる。個々の作品の作者は、先行の作品の存在を意識することによって自己の思念と力量を表現の中に投入し、文學史に參與してゆく自己を確認していたであろう。エリオットはこれを作家の歴史意識とよんだ。¹³ すなわち、個々の作品にも作者における傳統の繼承と創意のありかが看取できるわけであり、これを作品に内在する批評性ととらえるならば、これを總括する總集は、こうした批評行爲の連鎖を確認する結節点であったということができる。(王瑤氏によれば、中國文學批評における詩文評類は集部の「尾巴」に過ぎず、閑書と看做されたものであり、より實際的な影

響を與えたのは總集であつたというが、具體的な模範の提示こそより多く創作に資したのであろう。)作品におけるこの批評性をより端的に示したジャンルが模擬詩であつた。傅玄から江淹に至る六朝模擬詩の展開は、模擬行爲が本來有する批評的側面の發展として跡づけることができる。文學批評の高まりの中で模擬詩が生まれ、修辭技巧の洗練という課題を持ちつつ、對象をより正確に把握し、そこから様式を抽出するという、受容者と創作者の結合のかたちを示すものであつた。

注

(1) 王瑤氏「擬古與作偽」『中古文人生活』一九五一、棠棣出版社)は六朝時代を風靡した擬古的創作の理念を偽作と關聯させて、それが古人の歴史認識のひとつの型であるとの解釋を示し、それらが書かれた動機は(一)古を思ふ情を古人の身になつて表現した、(二)習作の方法として試みた、(三)個人の感懐を敘べた、というものであり、したがつて初めから後世に遺そうとする意圖はなく、自己の作と強調することさえもしな

かつたに違いない、と推測した。また興膳宏氏『文學論集』詩品古詩の條、一九七二、朝日新聞社)は「模擬は、その對象とする作品の精髓を的確に摘出して、加えて作者獨自の新鮮ないぶぎを送りこむ作業であり、過去の文學を繼承する一つのありかたとして、文學批評の歴史の上で見落せぬ意義を有している。」と評價している。小論もこの見解に負う。

(2) 『ロダンの言葉抄』高村光太郎譯、一九六〇、岩波文庫。
 (3) 炳宸氏「曹丕的文學理論」、『光明日報』一九五八・一〇・二八文學遺產。

(4) 擬比也、比古志以明今情(文選卷三十、陸機「擬古詩」劉良注)。徵象也(卷三十一、袁淑「徵曹子建樂府白馬篇」呂延濟注)。依亦擬也(集注本文選卷六十一上、王僧達「和琅邪王依古」呂延濟注)。代者擬意同、言代彼詩之意也(同、鮑照「代君子有所思」文選鈔)。

(5) 馮惟訥「古詩紀」にはこれ以前に何晏(??249)張華(232~300)の「擬古」と題する詩を収録するが、前者は『世說新語』規箴篇注引袁宏名士傳(「答五言詩以言志」)および『藝文類聚』卷九十玄鶴、『初學記』卷三十鶴(ともに「何晏詩曰」)、後者は『藝文類聚』卷八十八松(「晉張華詩曰」)に引かれて傳わる失題の詩である。

(6) 岡村貞雄氏「樂府題の繼承と傳玄」『支那學研究』第三十五號)は古辭の主題の繼承が傳玄に始まると指摘している。秋胡行の古辭は傳わらない。なお傳玄には「和班氏詩」(『玉

「豪新詠」卷二」という秋胡故事を扱った詩があり、『樂府詩集』ではこれを秋胡行の後に列するが、紀容舒『玉臺新詠考異』は、班固の詠史詩の中に秋胡を詠じた詩があつてそれに和した詩だろうと推測している。陳禹謨本『北堂書鈔』（卷四十一）には「擬班氏詩」佚句を引く。吉川幸次郎氏「班固の詠史詩」（神田博士還曆記念書誌學論集）に指摘。傅玄の艶歌行は古辭の二解までを模擬しているが、對照してみると類似どころか殆んど同じである。異なつた表現をとる部分は、李延年の歌（「顧傾人城、再顧傾人國」「漢書」外戚傳上、孝武李夫人引）、曹植「美女篇」（「借問女安居、乃在城南端、青樓臨大路、高門結重關」「文選」卷二十七）のほぼ同句を挿入している。こういういわば嵌め込み式の模擬は「擬四愁詩」と似た構造をもち、模擬のひとつの型となつてゐる。すなわち張衡「四愁詩」（『文選』卷二十九）は「我所思兮在○○、欲往從之○○○、……美人贈我○○○、何以報之○○○、……」という同じパターンを繰り返すが、擬者はここに語を嵌め込んでペロディを作る。同様に徐幹「室思」（『玉臺』卷一）の第三章「自君之出矣、○○○○○、思君如○○、○○○○○」の型に對して宋孝武帝（『玉臺』卷十擬徐幹詩、『類聚』卷三十作擬詩）以下がこの部分を獨立させて承け繼ぎ、古詩（其十七、其十八『文選』卷二十九）や飲馬長城窟行古辭（『文選』卷二十七、『玉臺』卷一作蔡邕）に「客從○方來、遺我○○○」がある故に謝惠連『玉臺』卷三代古以下に承

六朝模擬詩小考（衣川）

け繼がれ、樂府相逢狹路間行の「大婦」「中婦」「小婦」以下の六句が「三婦艶」として獨立して模擬されるといった形態である。

(7) 錢仲聯增補集說校『鮑參軍集注』に引く錢振倫注引。この

『淮南子』佚文は江淹「詣建平王上書」李善注（『文選』卷三十九）および『太平御覽』卷十四霜に見える。引用は後者に從つた。江淹も自己の理不盡な投獄に對して辯明した上書の冒頭にこの故事を措えている。なおこの説話が鄒衍と燕惠王を同時とする事の非については錢穆氏「先秦諸子繫年」卷四鄒衍攷（一九五六、香港大學出版社）參照。

(8) 黎活仁氏「『文選』劉楨『贈徐幹』詩寫作年代考」（未刊）は何焯の説に對し、この詩は洛陽で書かれ、受刑後の作品であることを考證している。

(9) 樂府秋胡行には秋胡故事を踏まえるものとそうでないものがあり、丘巨源の「秋胡詩」がそのいづれであつたかわからぬが、樂府題から創作されたものには違いない。

(10) 弟陸雲の書翰（『全晉文』）に「與兄平原書三十五通を收む、引用はこの排列による」がその手懸りとなる。「與兄平原書」の第四通には「一日見正叔、與兄讀古五言詩、此生歎息欲得之。」と記されている。（正叔は潘尼の字、兄とは陸機を指す）案ずるに、離居している兄に書翰を送つたのだから「與兄讀古五言詩」では意味をなさない。「兄讀」は「讀兄」の誤倒かと考えられる。すなわち「兄の書いた古五言詩」を潘尼

と讀んだ」の意であらう。「與」は介詞、賓語は省略。また「與」を謂、語と解して「兄の『讀古五言詩』^(?)のことを話した」と讀めぬこともない。「詩詞曲語辭滙釋」卷四に唐代の例を掲げる。(ここにいう陸機の「古五言詩」(もしくは「讀古五言詩」)が即ち擬古詩を指すのではないかと思われる。陸機が弟あての書翰に添えて届けたものに違いない。とすれば、書翰に言及する他の作品との關聯によってその書かれた時期を推測できる。同書翰(第四通)に「答少明詩亦未爲妙、省之如不悲苦、無惻然傷心言、今重復精之。」と書かれ、第十通には「弔少明殊復勝前。」と書かれている。「少明」が誰を指すのかは未詳、また「答少明」と言いながら陸雲の書きぶりは死を悼んだ詩らしく、あるいは「弔少明」と同一のものか)また第四通の「祠堂頌」已得、省兄文復稍論常佳、然了不見出語、意謂非兄文休者、云云」は第十通では、「祠堂贊甚已盡美、不與昔同、云云」と呼應している。「祠堂頌」と「祠堂贊」はおそらく同一のものであらう。)ゆえに第四通は第十通にやや先立って書かれたことが解る。とすると同じく第十通にふれる「漢功臣頌甚美」という「漢高祖功臣頌」(『文選』卷四十七)が、陸雲の「盛德頌」(『陸士龍文集』卷六)と同旨であることよって同じ頃に書かれたものとするならば、(姜亮夫氏『陸士衡年譜』それは陸雲が太子舍人の時であり、(陸雲盛德頌云、晉太子舍人黃士臣雲稽首再拜)元康の初である。潘尼も元康元年(21)より太子舍人であり、

陸機と親交をもっていた。したがって擬古詩がこの頃に書かれたと推測される。入洛後の作であることは、これらの詩のもつ意味に極めて重要な示唆を與えると思われる。なお姜亮夫氏が、切實な感情のない「模擬實習之作」と見做して入洛前に置くのには従い難い。

(11) 「文賦」の制作時期は論者によって些少の幅があるが、陸機の晩年永康元年(300)以後の一、二年であることで一致している。陳世驥氏「陸機の生涯」と《文賦》制作の正確な年代(『中國文學報』第八冊、一海知義氏譯、原刊一九四八年、増訂一九五一年)、遼欽立氏「文賦撰出年代考」(『學原』第二卷第一期、一九四八)、および兩氏「關於文賦疑年的四封討論信」(『民主評論』第九卷第十三期、一九五八)。勿論擬古詩と文賦(實踐と理論)の關係が撰出年代の先後に規定されるわけではない。

(12) 郝立權氏「陸士衡詩注」卷三引薛綜東京賦注、一九五八、人民文學出版社。

(13) 張華の紹介を受け劉道眞を訪ねて失望し(簡傲篇)、盧志の家で侮辱を受けたこと(方正篇)など。

(14) 興膳宏氏「潘岳陸機」(中國詩文選10、一九七三、筑摩書房)の「故郷喪失者のうた」参照。

(15) ここで古詩の繼承という點を概観しておく。この時代に「古詩」とは『詩經』を指すのが通例であった。西晉における「古詩」の用例を掲げると、まず賦を詩の六義に結びつけ

る公式論で「賦者古詩之流也」と言うのが左思及び皇甫謐の「三都賦序」(『文選』卷四及卷四十五)に見え、班固の「兩都賦序」(『文選』卷一)の規定そのままを用いるものである。

同じく連珠の意義が『詩經』に共通するとして、「合於古詩勸興之義」(傅玄敘連珠)と言う。また宮廷雅樂の歌辭の基本型を四言とすべきをいう議論の中で、「荀勗則曰、魏氏哥詩、或二言、或三言、或四言、或五言、與古詩不類、……故勗造晉歌、皆爲四言」(『宋書』樂志一、『晉書』樂志上)というのは所謂四言正統論であり、繁虔『文章流別論』が「古詩率以四言爲體」として展開する見解である。『詩經』以外を指す例は僅かに、『淮南子』(儼真訓高誘注)陸雲が「古五言詩」と特に稱したのも區別の意識あつてのことであろう。陸機が集中的に十四首もの擬作を作ったことは、詩句の襲用にとどまらず、ひとつの世界としての古詩を發見したものと見えるが、この頃から古詩が何らかのまとまった形になつていた可能性も考えられる。降つて東晉になると、『世說』文學篇に王恭(？々398)が弟に「古詩中何句爲最」と問うて自ら「廻車駕言述」篇の二句を詠じた話が載っている。これは同じく文學篇に謝安が甥に「毛詩何句最佳」と問うた話と同型であることから、この頃には古詩が既に編纂されていたとする推測を可能にする。(これを指すかは不明だが『隋志』に「古詩集九卷」を録する。)こうした背景から、「擬古」の題で古詩一般の風趣を湛えた作品が現われる。陶淵明(九首)鮑照

六朝模擬詩小考(衣川)

(八首)の連作であるが、そこには陸機のように特定の一首に模擬するのでなく一首の枠を破ることによって、陸機において隱微なかたちで潜んでいた詠懷性がより自由に託されているように思われる。宋の劉鑠は弱冠以前に擬古詩三十餘首を書いて陸機に亞々と評された。(『南史』宗室及諸王傳下)この評價にも窺えるごとく、劉鑠は古詩の模擬に當つて陸機を意識し乗り越えんと志していたと思われる。簡単な例だが、「行行重行行」篇の唯一の對句らしい對句は「胡馬依北風、越鳥巢南枝」であり、望郷を形象したこの單純な正對はこの詩に模擬するとき缺かせぬ位置を占めている。陸機は「王鮪懷河岫、晨風思北林」と表現したが、これに對し劉鑠は「寒鶯翔水曲、秋兔依山基」と『淮南子』説林訓の典故を用いて、生地を離れないのを羨むという逆方向に變えて新鮮さを見せたのであつた。特定の古詩に模擬する方法は齊梁陳の時代になると宴席の文學競技として「賦得」の形式に組込まれることにもなる。もともと模倣(まがい)と競争(きさう)が遊戲の基本的要素であることはロジェ・カイヨワ『遊びと人間』も指摘しているが、模倣詩がこの時代の貴族的社交の中に持ち込まれることによつて、その側面が一方的に噴出したのだと言える。遊戲の常として、そこでは詩を詠むという目的よりも過程に注意を拂い、凝つた制約を課することになる。模倣詩の遊戲がこうした方向に進むと、詩の素材としての古詩は宮體の趣向に沿う閨怨の側面が好まれ、傳統的功利性(寓意性)から脱化し、

詩句それ自身の洗練へと向かう。それは劉鏐の詩にも既には
 らまれていた。「臥覺明燈晦、坐見輕紗縞、淚容不可飾、幽鏡
 難復治、願垂薄暮景、照妾柔榆時」(擬行行重行行) 梁元
 帝が陸機よりも劉鏐に荷擔したのもまた當然である。(『太平
 御覽』卷五百八十七引金樓子云、劉休玄、好學有文才、爲水
 仙賦、時人以爲不減洛神賦、擬古詩、時人謂陸士衡之流也、
 余謂水仙不及洛神、擬古勝乎士衡矣。)

- (16) 曹丕の立太子は建安二十二年十月。王粲は同年一月、徐幹、
 陳琳、應瑒、劉楨らは二月、阮瑀は十七年に没しているから、
 『太子』とするのは誤まりだが、曹植は建安十六年に書いた
 「離思賦序」にも『太子』と呼んでおり、呼稱は嚴密ではな
 かったらしい。

- (17) 例えは一詩の長さ。森博行氏『江淹雜體詩三十首について』
 (『中國文學報』第二十七冊) に指摘がある。

- (18) 小尾郊一氏『中國文學に現れた自然と自然觀』一九六二、
 岩波書店、p. 291, p. 300 以下参照。

- (19) 元の方は「不文」は宋武帝を、「雄猜多忌」は文帝を指し
 て皮肉り、これが謝靈運の命取りにもなった、との穿った解
 釋を加えるが(『文選顏鮑謝詩評』)、その筆禍説の當否につい
 ては根據を缺く。また、何焯は「當是與廬陵周旋時所作」(『義
 門讀書記』文選卷三)と推測している。

- (20) 中品魏文帝條「新歌百許篇」とするテキストに従う。
 (21) 「常聞詩人語、不醉且無歸」(公諷詩)、「詩人美樂士、雖

客猶願留」(從軍詩其五)、「哀彼東山人、喟然感鶴鳴」(同、
 其二)、「我有素餐責、誠愧伐檀人」(同、其四)、「悟彼下
 泉人、喟然傷心肝」(七哀詩其二)。

- (22) 下定雅弘氏「王粲詩について」(『中國文學報』第二十九冊、
 p. 70 参照)。

- (23) 事實誤認もないではない。「劉楨」詩に「北渡黎陽津」と
 言うのは史實に合わない。張銑注は「謂從太祖征袁紹」と解
 するが、曹操が袁紹を官渡に伐ったのは建安五年、袁譚、袁
 尚を黎陽に伐ったのは八年のこと。ところが劉楨の起家は丞
 相掾であるから、曹操が丞相となった十三年以後に幕下に入
 ったとしなければならぬ。伊藤正文氏「劉楨傳論」(『吉川
 博士退休記念中國文學論集』一九六八、筑摩書房、注(5)に指
 摘)。

- (24) 「力強羽擊いて天高く飛翔したい」という比喻表現の意
 味について、呂向注は「喻將來貴仕」と解する。なお陸機「擬
 明月皎夜光」詩に「嗚昔同宴友、翰飛戾高冥」の句があり、
 これは明らかに高位に登って舊友から離れていったことを意
 味している。劉楨の詩中の鳥の形象についてみると、「贈從
 弟」詩其三(『文選』卷二十三)の「鳳凰集南嶽、徘徊孤竹根、
 於心有不厭、奮翅凌紫氛、豈不常勤苦、羞與黃雀羣」が最も
 近く、小人との同席を拒んで獨り高踏的な立場を守ろうとす
 ることを表わしている。他にも飛鳥の自由さを示す例がある。
 「雜詩」(同卷二十九)「方塘含白水、中有燒與鴈、安得蕭

肅羽、從爾浮波瀾」即ち職務に倦んで逍遙したとき眼にした鳥は繡料から自由であることの象徴であった。「鳥が高く飛ぶ」形象はもとも『詩經』の比興的發想に出て、自由自得を示すものが多い。(例、小雅四月、大雅旱麓、なお黎活仁氏「文選謝靈運擬魏太子鄴中集八首劉楨一首五臣注之謬誤」参照『鄧林遊獵見聞』一九七五、華實出版社。

(25) 太子の位に對する曹植の態度や、曹丕の植に對する感情については古來議論があるが、二人を對立させて曹植に荷擔する見方が劉宋代には支配的であったことは、「七步詩」を載せる『世說新語』や裴松之の『三國志』注がこの時代に書かれたことなどからほぼ推察できる。謝靈運の「平原侯植」詩の書きぶりも、こういう見方の影響下にあると思われる。

(26) 「吾昔以信人之心無怠於左右、深爲東郡太守王機、防輔史倉輯等任所誣白、獲罪聖朝、身輕於鴻毛而謗重於太山。……機等吹毛求瑕、千端萬緒、然終無可言者。」

(27) 專論として森博行氏の論考(注(17))があり、若干補うつもりでこの章を書いたことを断っておく。

(28) 謝靈運は鄴下詩人群の再現を假りて自らのことを語ろうとしたのだと思われるが、小序の中では對象詩人の人間性や文學の傾向について指摘している。それは詩の序として、靈運が模擬詩を作る際の、詩の内容と風趣を示したものであるが、「王粲」について「自傷情多」と言うのをはじめ、「袁本初書記之士、故述喪亂事多」(陳琳)、「少無宦情、有箕頌之

心事、故任世多素辭」(徐幹)、「卓犖偏人而文最有氣、所得頗經奇」(劉楨)など、建安文人批評の早い時期の言及として意義をもつ。

(29) 序の引用は『文選集注』卷六十一上によるが、諸本と校合して改めた箇所もある。

(30) 「各具美兼善」の五字、『集注本』は「各其美兼善」、六臣注本は「合其美並善」と書く。いま『江文通集』(卷四)及び『初學記』(卷二十一)に従う。

(31) 「建元二年、初置史官、以(檀)超與驃騎記室江淹掌史職。上表立條例、開元紀號、不取宋年。封爵各詳本傳、無假年表。立十志、……超史功未就、卒官。江淹撰成之、猶不備也。」『隋志』には江淹齊史十三卷を録す。

(32) 「庶」字、『集注本』脱す。今諸本に依って補う。

(33) 「雜體詩」より遅れて書かれた(注(33)参照)劉勰『文心雕龍』(499~501の間に成書)の出発点も江淹と同じであった。

劉勰は「雜體詩」序と似た表現で劉勰の動機を説く。「詞人屬文、其體非一、譬甘辛殊味、丹素異彩、後來祖述、識味圓通、家有詆訶、人相拊撫、故劉勰文心生焉。」(『史通』自敘篇)

(34) 「江左篇製、溺乎玄風、嗤笑徇務之志、崇盛亡機之談、袁(宏)孫(綽)已下、雖有雕采、而辭趣一揆、莫與爭雄。」(『文心雕龍』明詩篇)

「永嘉時、貴黃老、尚虛談。于時篇什、理過其辭、淡乎寡

味。爰及江表、微波尚傳。孫綽許詢、桓(溫)庾(亮)諸公、詩皆平典、似道德論、建安風力盡矣。」(『詩品』序)

39) その例

- ① 「班婕妤詠扇」の二句を『御覽』卷七百二に「古詩」として引く。
 - ② 「魏文帝遊宴」の全句を『御覽』卷五百九十二に「魏文帝遊宴詩」として引く。
 - ③ 「陳思王贈友」の四句を朱緒曾『曹集考異』卷五失題各詩に佚詩として引く。
 - ④ 「劉文學感遇」を楊德周『建安七子集』の劉楨の部分に「感遇」として収める。(鈴木修次氏『漢魏詩の研究』に指摘)
 - ⑤ 「阮步兵詠懷」は陳德文、范欽刻『阮嗣宗集』詠懷詩の其二十二に原作と入れ替って収められた。『阮籍集』卷下詠懷詩其二十二校勘記に指摘、一九七八、上海古籍出版社)
 - ⑥ 「陶徵君田居」は陶詩の「歸園田居」五首に混入して六百とされ、蘇軾に次韻詩(『施注蘇詩』卷四十一)を作らせた。
 - ⑦ 「鮑參軍戎行」の二句を吉士瞻は鮑照の詩として誦した。『南史』卷五十五吉士瞻傳)
 - ⑧ 「休上人怨別」は唐宋人に惠休の作と受けとられた。(王楙『野客叢書』卷十二引遯齋閒覽) 右二例は駱鴻凱『文選學』徵話篇の指摘による。
- 案ずるに、『南史』吉士瞻傳の傳えるところが事實とすれば、この種の例の最も早いものであり、これによって「雜體

詩」の制作時期を推測できる。『南史』には次のように記す。

「少有志氣、不事生業。時徵士吳苞見其姿容、勸以經學、因誦鮑照詩云、豎儒守一經、未足識行藏、拂衣不顧。年逾四十、忽忽不得志、……及梁武起兵、……」これが梁武の起義(永元二年500)以前であることは明らかであり、しかも文脈は弱年の頃の狂狷を示すものとして書かれている。とすれば、四十歳を越えた永元二年より二十年は溯ると予想でき、加えて、眞作と混同されるような一定期間を斟酌しても470~480年前後のこと、宋末齊初と思われる。(湯惠休の卒年は未詳、宋末か?) 江淹が國史を掌ったのもこの頃であった。史家の文學史論に近い江淹の認識も史官前後のものとするれば納得がゆく。

36) 尤本は「悼亡」とするが、集注本、九條本並びに「雜體詩」郭弘農遊仙李善注が「述哀」とするのに従う。

37) ……邊城苦鳴鏑、羽檄飛京都、雖非甲冑士、曠昔覽稷卨、長嘯激清風、志若無東吳、鉛刀貴一割、夢想聘良園、左峙澄江湖、右盼定羌胡、功成不受爵、長揖歸田廬。

38) 主父宦不達、骨肉還相薄、買臣困采樵、伉儷不安宅、陳平無產業、歸來鬻負郭、長卿還成都、壁立何寥廓、四賢豈不偉、遺烈光篇籍、當其未遇時、憂在填溝壑、……

39) 濟濟京城內、赫赫王侯居、冠蓋陰四術、朱輪竟長衢、朝集金張館、暮宿許史廬、南鄰擊鐘磬、北里吹笙竽、寂寂楊子宅、門無卿相與、寥寥空宇中、所講在玄虛、……

- (40) ……蘇秦北遊說、李斯西上書、俛仰生榮華、咄嗟復彫枯、……
- (41) 川合康三氏「阮籍の飛翔」『中國文學報』第二十九冊、p.88
參照。
- (42) 逸翮思拂霄、迅足羨遠遊、清源無增瀾、安得運吞舟、珪璋雖特達、明月難闢投、潛穎怨清陽、陵茗哀素秋、悲來惻丹心、零淚緣纓流。
- (43) 「傳統と個人の才能」『文藝批評論』矢本貞幹譯、一九六二
二改版、岩波文庫。
- (44) 「中國文學批評與總集」『關於中國古典文學問題』一九五
六、上海古典文學出版社。